

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語学習者はどのようなリソースを用いているのか？

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小河原, 義朗 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002954

日本語学習者はどのようなリソースを用いているのか？

小河原義朗（日本語教育部門第一領域）

1. 背景と目的

国内外の日本語学習者の学習目的・分野・母語，各国・地域における日本語の社会的位置づけ，日本語教育機関の設備・環境，教師の教育観や日本語能力等，日本語教育の多様性についての認識は定着しつつあり，その多様性に対してそれぞれの教育現場においてそれぞれの対応がなされてきている。一方，学習者及び教師の地球規模での移動や交流が加速し，様々な情報流通の在り方の変化に伴い，日本語を学習する，あるいは教える環境や手段も多様化していることから，日本語教育の各機関や教育現場の連携体制を整えながら，支援の在り方も柔軟に対応していく必要がある。そのために，まず国内外で日本語を学習し，あるいは教えている人々がどのような環境・手段で日本語を学習し，あるいは教えているのかについて広く情報収集し，「多様化」している現状を把握する基礎研究が不可欠である。

国立国語研究所では，国内外の地域（日本，タイ，オーストラリア，韓国，マレーシア，台湾）を対象に各地域・機関と連携しながら5年計画の大規模調査「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」を実施している。本発表では，その中から先行して実施したタイ（2001年実施）と韓国（2003年実施）での調査結果を比較・検討しながら，学習者がどのようなリソースを用いて学習しているのか，さらにはそれらをどのように用いて学習しているのか，その現状について報告する。

2. 方法

本調査では，微視的（個々の日本語学習や教育等）・巨視的（日本語教育が置かれている社会環境等）の視点から，学習者・教師の双方を対象とし，アンケート及びインタビューの手法を用いて行った。

特に学習者を対象としたアンケートでは，学習者が日本語を学習する際には何らかのモノ・ヒト・コトといった対象（リソース）に接触すると考えられることから，学習者がどのようなリソースにどのように接触しているのかについて質問する項目が中心になっている。また，それらの接触の対象や方法等に影響すると考えられる項目として，日本語学習歴，学習動機，訪日経験等についてもあわせて尋ねている。インタビューでは，アンケートでは聞けない具体的な接触状況やそれに対する評価等について聞いた。そのほかに，教育制度や出版状況，インフラ状況等，タイと韓国の日本語教育にかかわるマクロレベルの情報について，文献調査，現地聞き取り調査もあわせて実施した。

3. 対象

タイ調査では，国際交流基金の協力を得て，タイのバンコック市内で日本語教育を実施

している 87 機関を対象にアンケートを配布・回収し、77 機関から回答を得た。有効回答数は学習者 5,919 名、教師 204 名である。韓国調査では、韓国全体を視野に入れ、ソウル、釜山、光州の 3 地域を核として行った。高等教育機関については日本語・日本語教育関連学会を通じて、中等教育については各地域の日本語教育研究会を通じて、調査協力校の選定、アンケートの配布及び回収を行った。学校教育以外の機関については調査協力機関を経て行った。有効回答数は学習者 6,739 名、教師 631 名である。両調査とも、並行してインタビュー調査を実施しているが、本発表では学習者対象のアンケート結果を中心に報告する。

以下の結果と考察では、国際交流基金日本語国際センター（2000）を参考に調査対象機関を①～③の 3 つに分類し分析対象とした。両調査における機関数と回答者数の内訳を表 1・2 に示す。

- ①「中等教育機関」：日本の高等学校（後期中等教育）に当たる教育機関
- ②「高等教育機関」：日本の大学院・大学・短期大学・高等専門学校に当たる教育機関
- ③「学校教育以外の機関」：上記①②に含まれない機関

＜表 1：タイ（バンコック）調査における機関数と回答者数の内訳＞（ ）内は%

	中等教育	高等教育	学校教育以外	合計
機関数	41 (53.2)	33 (42.9)	3 (3.9)	77 (100)
高校生	2710 (100)	0 (0)	58 (8.9)	2768 (46.8)
大学生	0 (0)	2531 (98.9)	143 (22.0)	2674 (45.2)
大学院生	0 (0)	28 (1.1)	24 (3.7)	52 (0.9)
その他	0 (0)	0 (0)	425 (57.7)	425 (7.1)
計	2719 (45.8)	2559 (43.2)	650 (65.4)	5919 (100)

＜表 2：韓国調査における機関数と回答者数の内訳＞（ ）内は%

	中等教育	高等教育	学校教育以外	合計
機関数	45 (47.9)	38 (40.4)	11 (11.7)	94 (100)
高校生	3149 (100)	0 (0)	104 (9.4)	3253 (48.3)
大学生	0 (0)	2261 (92.4)	464 (41.9)	2725 (40.4)
大学院生	0 (0)	181 (7.4)	39 (3.5)	220 (3.3)
その他	0 (0)	7 (0.3)	460 (41.6)	467 (6.9)
無回答	28	7	39	74 (1.1)
計	3177 (44.4)	2456 (34.3)	1106 (15.4)	6739 (100)

4. 結果と考察

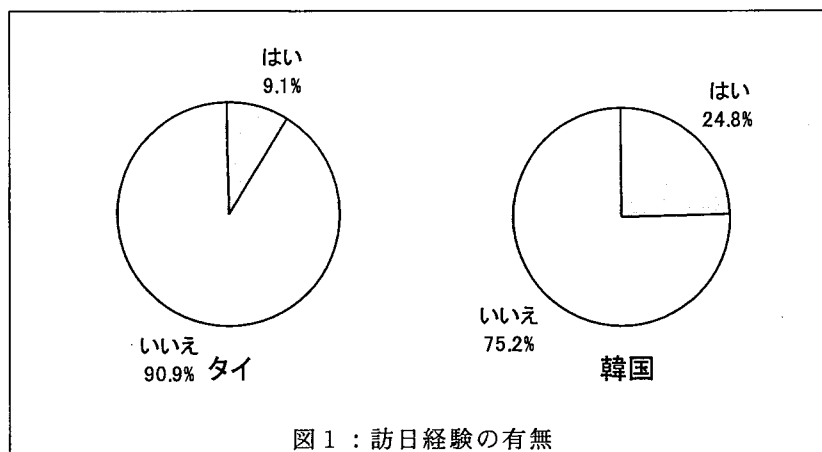
4.1 学習者

まず、回答者である学習者の背景について報告する。タイでは、性別は女性が 75.7%、国籍は 99.4%がタイ人で、母語も 99.0%がタイ語となっている。年齢は、中等教育では高校生が対象であることから 10 代 (97.0%)、高等教育・学校教育以外では 20 代 (67.3%・63.8%)

が最も多い。韓国でも同様の傾向で、女性が 62.3%，国籍は全員韓国人で、母語は韓国語，年齢も中等教育では 10 代（99.7%），高等教育・学校教育以外では 20 代（90.4%・63.9%）が最も多い。

訪日経験については，図 1 のようにタイでは 90.9%，韓国では 75.2% が経験がない。訪日経験のある学習者の訪日

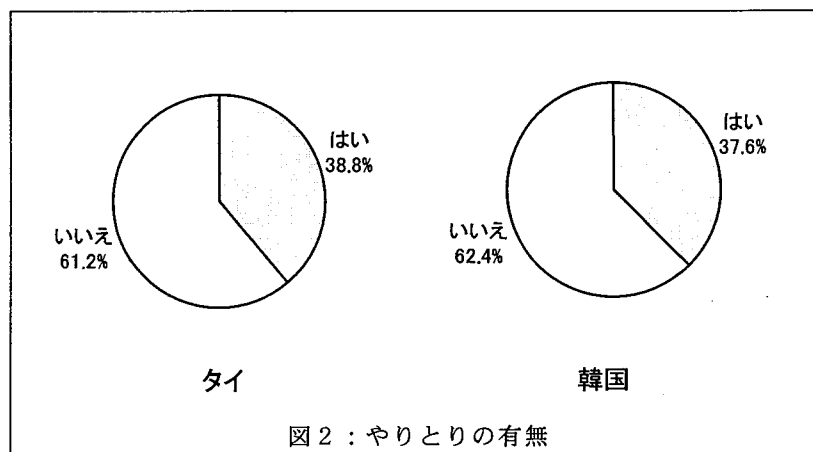
目的は両国とも「観光」（63.4%・64.3%）が最も多い。日本語学習動機は「日本語に興味があるから」がほぼ共通して高いが，タイでは「就職に有利だから」，韓国では「日本や日本のものに興味があるから」といった動機が高い点で違いが見られる。



4. 2 ヒトとの接触

4. 1 のような学習者に対して，「ヒト」との接触，つまり日本語の授業以外で人との日本語でのやりとりによる接触について聞いたところ，タイでは全体で 2,249 人（38.8%）が「ある」，3,552 人（61.2%）が「ない」，韓国では全体で 2,517 人（37.6%）が「ある」，4,183 人（62.4%）が「ない」と答え，共通してやりとりのない学習者の方が多い（図 2）。

続いて，やりとりをしている学習者がどのような相手とどのようにやりとりをしているのかについて検討した。まず，身の回りにいる様々な人の中で，最もやりとりをする相手としては，



タイでは「日本語教師」が最も多く，全体的に①「日本語教師」（43.8%），②「学校の友人」（18.3%），③「知り合い」（15.4%）の順となっている（表 3）。韓国では，①「知り合い」（25.2%），②「日本語教師」（24.6%），③「学校の友人」（20.4%）の三者がほぼ同じ割合で多く（表 4），どちらの調査においても日本語学習歴，動機，日本語力等による違いは余り見られない。相手の国籍は，「日本語教師」「知り合い」の場合は「日本人」，「学校の友人」の場合はタイでは「タイ人」，韓国では「韓国人」が多い。やりとりを始めたころの日本語力は，タイでは相手が「日本語教師」の場合は「ほとんどできなかった」，「学校の友人」「知り合い」の場合は「少しできた」，韓国では相手が「日本語教師」「学校の友人」の場合は「少しできた」，「知り合い」の場合は「日常会話程度できた」程度のレベルでや

りとりを始めた学習者が多かった。

しかし、やりとりの頻度は、相手が「日本語教師」「学校の友人」の場合は「週2, 3回」, 「知り合い」の場合は「月に2, 3回」が共通して多い。やりとりの手段としては、「知り合い」の場合は「電子メール」等も見られるが、基本的に「会って話す」が多く、共通している。日本語の割合はタイではどの相手でも「日本語と他の言語が半々」、韓国では「学校の友人」の場合は「半々」で、「知り合い」「日本語教師」の場合は「全部日本語」「主に日本語」が多い。やりとりの内容は「日本語教師」の場合は「日本語」や「勉強」について、「学校の友人」「知り合い」の場合は「生活」についてが共通して多い。日本語でやりとりをする理由は、「日本語を使うのは楽しい」「日本語の母語話者と話したい」「日本語能力の向上や維持」といった理由が共通して多かった。これらのことから、人とのやりとりの傾向は両国ともかなり共通していて、学習者は「楽しい」「話したい」と言いながら、相手、内容、機会等の点で非常に限られたやりとりしかしていないという現状がうかがえる。

<表3：最もやりとりをする相手（タイ）>

相手	国籍	頻度	内容	手段	割合
①日本語教師	日本人	週2・3回	勉強	直接	半々
②学校の友人	タイ人	週2・3回	生活	直接	半々
③知り合い	日本人	月2・3回	生活	直接	半々

<表4：最もやりとりをする相手（韓国）>

相手	国籍	頻度	内容	手段	割合
①知り合い	日本人	月2・3回	生活	メール等	全部日本語
②日本語教師	日本人	週2・3回	勉強	直接	主に日本語
③学校の友人	韓国人	週2・3回	生活	直接	半々

一方、やりとりをしない学習者に対してその理由を聞いたところ、共通して「自分の日本語力が十分ではないから」と「日本語を使う相手がないから」が多かった。しかし、前者については、確かに学年や学習歴が進むとやりとりが増える傾向にあるが、学年や学習歴が低くても実際にやりとりしている学習者はいらる。前述のやりとりを始めたころの日本語力についても、十分とは言えないレベルで始めている学習者が多かった。後者についても、同じ環境でやりとりをしている学習者が「相手がないから」と言っている学習者と同程度いる。また、学習者の動機の種類との関係においても、いずれの動機でもやりとりをする学習者としらない学習者が同程度いる。さらに、社会人学習者で日系企業に勤めている人や、大学の日本語主専攻の学習者、特に韓国では訪日経験があり、日本人の知り合いがいる学習者などはやりとりの機会が多いが、それ以外の学習者でもやはりやりとりをしている学習者がいる。このことから、やりとりをしないのは、単に日本語力や相手の存在だけの問題ではないようである。

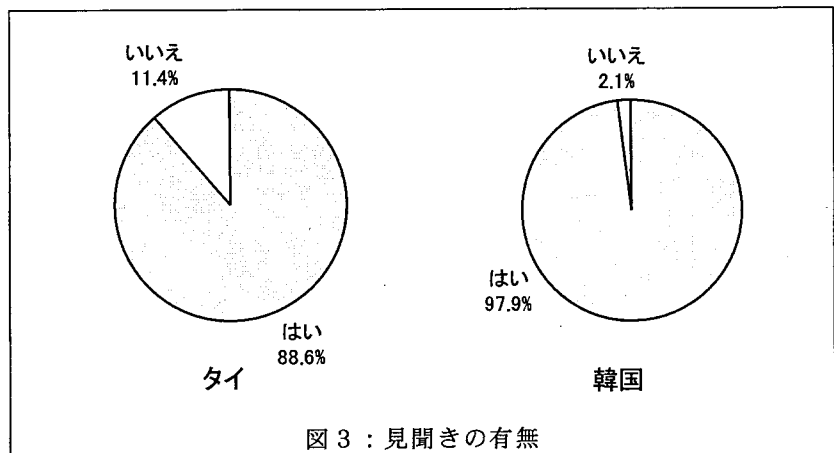
この点については、学習者に対するインタビュー調査から、確かに日本語力の低さや相手がないという理由を指摘する学習者がいた。しかし、その一方でタイでは日本人の集まる観光地やショッピングセンター、バックパッカーのいる場所等に行って日本人に話し

かける，韓国でも観光地や免税店，日本風の居酒屋，「日本語カフェ」（日本人と韓国人の交流を目的とした喫茶店）に行つて日本人とやりとりをする，W杯サッカーやアジア大会等での日本語ボランティアに参加したといった学習者がいた。つまり，学習者が自分でやりとりの機会を作り出し，日本語によるやりとりを実現し，さらにはそれによって動機づけや日本語力を高めていると自己評価している事例が見られた。これらの機会はこれまで見てきたように決して特別なものではなく，国や地域を越えて学習者の身の回りに存在している。そしてその機会を自然に，かつ巧みに利用している事例が多いことから，やりとりの有無にかかわらず，やりとりの対象に関する情報自体が少ない，あったとしてもその対象への接触・利用の仕方がわからないという可能性が考えられる。

4.3 モノとの接触

次に，「モノ」との接触，つまり学習者の身の回りで，日本語で書かれた物や日本語が使われている物を見たり聞いたりすることの有無について聞いた。タイでは 5,108 人（89.5%），韓国では 5,230 人（80.0%）の学習者が「はい」と答えている。さらにその中で日本語の授業以外でそれらの物を見たり聞いたりすることの有無について聞いたところ，タイでは「はい」が 4,512 人（88.6%），「いいえ」が 582 人（11.4%），韓国では「はい」が 5,122 人（97.9%），「いいえ」が 108 人（2.1%）で，共通してほとんどの学習者が日常生活の中で何らかの日本語を見聞きしていることがわかる（図 3）。

学習者がどのような対象をどのように見聞きしているのかについて分析したところ，タイでは全体的に①「テレビ」（57.0%），②「マンガ」（54.6%），③「雑誌」（48.8%）が多いが（表 5），中等教育では「アニメ」「ゲーム」「お菓子の包装」，高等教育では「歌」「商品の説明書」，学校教育以外では「書類」「ファックス」「商品・製品のカタログ」など，所属に特徴的な物が挙げられた。



<表 5：見聞きするもの（タイ）>（ ）内は%

順位	全体	中等教育	高等教育	学校教育以外
1位	テレビ (57.0)	テレビ (61.2)	テレビ (55.3)	テレビ (45.6)
2位	マンガ (54.6)	マンガ (60.8)	マンガ (52.6)	雑誌 (41.9)
3位	雑誌 (48.8)	雑誌 (48.8)	雑誌 (50.6)	マンガ (34.8)

最もよく見聞きしている物は所属に共通して「テレビ」が多いが（表 6），見聞きする頻度は「月に 2，3 回」から「毎日」，内容も「日本語」「社会・生活」など様々である。見聞きする理由は，「楽しいから」「日本や日本語に興味があるから」「日本語の学習に役に立つと思うから」「日本や日本人について知ることができるから」「その分野やトピックに興

味があるから」等のいずれの項目も共通して高い。また、自由記述の回答から、中等教育では「ゲームのため」、高等教育では「仕事のため」「日本人の知り合いを作るため」、学校教育以外では「日本人とのコミュニケーションのため」「仕事で必要だから」など、所属に特徴的な動機が見られた。

<表6：最もよく見聞きするもの（タイ）>（ ）内は%

順位	全体	中等教育	高等教育	学校教育以外
1位	テレビ (21.2)	テレビ (17.3)	テレビ (17.5)	テレビ (13.5)
2位	ゲームソフト (11.6)	ゲームソフト (12.2)	雑誌 (9.8)	その他 (9.1)
3位	マンガ (11.1)	マンガ (10.6)	マンガ (8.0)	音声テープ (6.6)

韓国では、全体的に「マンガ」「テレビ」「ビデオ・DVD」「コンピュータ」が多く（表7）、最も見聞きする物として「コンピュータ」が所属に共通して多いが（表8）、中等教育での「マンガ」や「ゲームソフト」、高等教育での「ビデオ・DVD」や「CD」といった所属の特徴が見られる。この点については、タイに比べると韓国ではコンピュータ環境の整備やマンガ等の価格面で物との接触の範囲が広く、種類も多いと考えられる。そのため、接触の頻度は「コンピュータ」や「CD」は「毎日」、テレビは「週2、3回」、内容が「文化・芸術」の場合は「コンピュータ」「テレビ」「CD」「ビデオ」、 「スポーツ・趣味」の場合は「マンガ」「ゲームソフト」「コンピュータ」、 「日本語学習・日本語」の場合は「コンピュータ」「本」、動機との関係では「楽しいから」「日本語に触れたいから」の場合は「コンピュータ」「テレビ」「マンガ」、 「日本語能力の向上や維持のため」の場合は「テレビ」「コンピュータ」、 「様々な情報が得られるから」「日本や日本人について知ることができるから」の場合は「コンピュータ」というように、学習者は目的によって物との接触を使い分けているようである。

<表7：見聞きするもの（韓国）>（ ）内は%

順位	全体	中等教育	高等教育	学校教育以外
1位	マンガ (52.9)	マンガ (59.4)	ビデオ・DVD (55.1)	テレビ (54.2)
2位	テレビ (48.1)	コンピュータ (46.6)	テレビ (54.2)	ビデオ・DVD (50.1)
3位	ビデオ・DVD (47.9)	ビデオ・DVD (40.6)	マンガ (51.3)	コンピュータ (43.6)

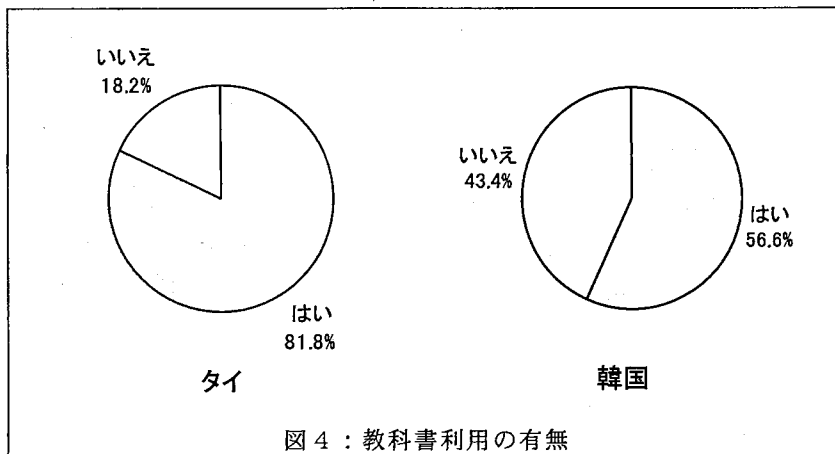
<表8：最もよく見聞きするもの（韓国）>（ ）内は%

順位	全体	中等教育	高等教育	学校教育以外
1位	コンピュータ (16.9)	マンガ (21.3)	テレビ (19.5)	テレビ (21.1)
2位	テレビ (16.2)	コンピュータ (16.4)	コンピュータ (18.5)	コンピュータ (14.9)
3位	マンガ (15.2)	ゲームソフト (11.2)	ビデオ・DVD (14.1)	ビデオ・DVD (14.4)

これらのことから、物の価格や流通等の違いから接触できる物の範囲や種類には違いが見られるものの、国や地域を越えて学習者には授業以外の日常生活の中でそれぞれの動機

や必要性に応じた様々な物との接触が起こっていることがうかがえる。

一方、学習者が現在日本語の授業で「教材」として使っている日本語教科書や配布物に関して、授業時間外にも何らかの形で利用しているのかについて聞いたところ、図4のようにタイでは「はい」が4,582人(81.8%)、「いいえ」が1,017人(18.2%)、韓国では「学校の授業にあるから」という消極的な日本語学習動機から高校での利用が比較的少ないが、全体では「はい」が3,741人(56.6%)、「いいえ」が2,868人(43.4%)で利用している学習者の方が多かった。



しかし、利用方法としては、タイでは全体的に

①「暗記、暗唱する」(68.3%)、②「語句の意味を調べる」「練習問題を解く」(67.6%)が多く、「わかる人に質問する」といったことはほとんどなされず、「相手を見つけて練習する」については逆に学年が上がると減る傾向にある。韓国も同様で、全体的に①「暗記、暗唱する」(54.1%)、②「語句の意味を調べる」(48.8%)、③「漢字に振り仮名をふる」(45.5%)が多く、「練習相手を見つけて会話の練習をする」は少ない。利用しない学習者の理由は、タイでは①「使い方がわからないから」(41.1%)が最も多く、②「授業以外の時間に勉強をしないから」(30.5%)、韓国でも①「授業以外の時間に勉強をしないから」(56.7%)が最も多く、続いて②「どうやって使ったらいいかわからないから」(17.3%)となっている。このことから、教科書等は授業外でも利用されている一方で、「勉強＝教科書」といった学習者の教科書等に対する考え方や利用は非常に固定化されており、限られた利用にとどまっていることがわかる。

また、日本語学習のために現在どのような物を使っているのかについて聞いたところ、タイでは全体的に①「文法解説書」(71.9%)、②「日本語のテレビ番組、日本の映画」・「日本語の歌の入った音楽テープ、CD」(30.9%)の順で「文法解説書」が多い。さらに、日本語学習や日本理解のために今後さらに充実を希望する物についても、タイでは全体として①「文法解説書」(67.6%)、②「日本語のテレビ番組、日本の映画」(61.3%)、③「辞書」(60.1%)の順で、「文法解説書」のニーズが高いことがわかる。学習者へのインタビューでも、学習者の多くを占める初級レベルではタイ人教師のタイ語による文法の授業が多く行われており、会話や聴解といった運用に関する授業が少ない点が指摘されていた。その一方で、学習者の日常において比較的接触しやすいテレビ番組の利用とその充実の希望も見られる。これらのことから、学習者の日本語学習において教室での教科書等による文法学習が大きな位置を占め、身の回りに自然に存在する日本語との自由な接触と日本語学習とが有機的に関係付けられていない現状がうかがえる。

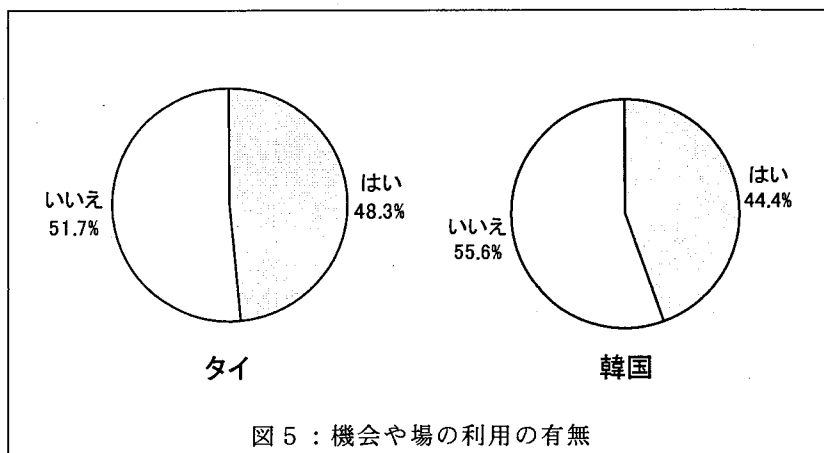
韓国でも、日本語学習のために使っている物として、全体的に①「学習参考書・問題集」(74.1%)が最も多く、②「日本語の歌」(51.2%)、③「日本語のマンガ」(37.5%)となっている。表8で示したように、接触の多い「インターネット」「web」「チャット」等のコ

ンピュータ関係は利用しているにもかかわらず、「日本語学習のため」には使っていない、つまり日本語学習とは認識されておらず、学習と結び付いていない可能性がある。また、充実を希望する物としては①「留学の機会」(38.9%)、②「日本語の映画」(37.7%)、③「学習参考書・問題集」(37.4%)、その中で特に希望するものについては、「留学の機会」「日本人との交流会」「家庭訪問・ホームステイ」の3つが共通して多かった。タイに比べると物が豊富に存在する韓国においても、日本語学習というと教科書や参考書による学習であり、機会があれば即「留学」といった学習観があり、日常の中で自然に接触している物とのつながりが余り見られない。

4.4 コトとの接触

最後に、「コト」との接触、つまり学習者が授業以外の様々な日本語学習の機会や場をどのように利用しているのか等について聞いた結果について検討する。

利用経験の有無については、タイでは「ある」が2,622人(48.3%)、「ない」が2,804人(51.7%)、韓国では「ある」が2,864人(44.4%)、「ない」が3,593人(55.6%)となっている(図5)。利用経験のある機会や場としては、タイでは①「日本・日本語に関するイベント」(59.5%)、②「日本人との交流会」(33.8%)、③「日本人のいる場所、日本人が集まる場所」(32.3%)の順となっている。韓国では①「日本人のいる場所、日本人が集まる場所」(31.3%)、②「日本人との交流会」(27.8%)が多い。それらの機会や場を再度あるいは継続して経験したいと思う気持ちの有無については、



タイでは「ある」が91.2%と多く、具体的には①「日本・日本語に関するイベント」(27.4%)、②「日本人との交流会」(26.4%)が多かった。その理由としては、①「日本語能力が向上するから」(84.4%)、②「習った日本語を使ってみたくから」(65.8%)、③「楽しいから」(61.2%)となっている。韓国でも同様に「ある」が87.6%と多く、①「日本人家庭への訪問・ホームステイ」(39.0%)が所属に共通して最も多く、②「日本人との交流会」(17.1%)、③「日本人のいる場所、日本人が集まる場所」(12.8%)の順となっている。

一方、利用経験のない学習者にその理由を聞いたところ、タイでは①「利用したいと思うが、そのような機会や場所がないから」(71.4%)、②「時間がないから」(34.0%)、③「日本語がわからないと思うから」(30.4%)となっており、特に利用したいが機会や場所がないという理由が多い点は、学習者に対するインタビューでも共通して見られた。しかし、同じ機関やクラスに所属しながら、例えば国際交流基金の現地図書館や日本語関係書籍が安く手に入る古本屋といった場で実際に日本語に接触している学習者と、そういった情報自体を全くもたない学習者がいた。これらのことから、身の回りに日本語学習に関する機会や場があり、それらの利用を希望しているにもかかわらず、それらについての情報に触れ

ること自体が限られているという現状がうかがえる。韓国においても同様で、インタビューから情報がないという学習者がいる一方で、タイとは異なりインターネット等を通じて情報としては知っているが実際には利用できていない、あるいは利用することの意義がわからないということが考えられる。

5. これからの支援の可能性

本調査から、海外という環境においても、学習者は日本語の授業以外に日常生活において身の回りにある様々なモノ・ヒト・コトとしてのリソースを通じて日本語と様々な接触をしていることが明らかになった。しかし、そのような接触を日本語学習にうまく利用できている学習者とできていない学習者がいる。そして、利用できている学習者も相手、内容、機会等の点で限られた利用にとどまっているという現状が明らかになった。このような現状から以下の点を指摘することができる。

まず、各現場に応じて学習者の身の回りにある日本語学習のための様々なモノ・ヒト・コトとしてのリソースに関する情報を収集し、学習者を取り巻く学習環境と学習手段に関する実態を把握し、学習者に提供することである。限られた情報の中であっても意識的・無意識的にかかわらず、リソースとの接触の機会を目的に応じて自ら作り出し、リソースを日本語学習にうまく利用できている学習者がいる。このような学習者がどのようなリソースにどのように接触しているのかについてよく観察することが必要である。このようにして情報を収集、検討し、学習者に提供することで、リソースとの接触が起きる、新たなリソースへの媒介となる、あるいは学習者の日本語学習への動機づけにもつながる可能性がある。さらに、4. 2にあるように日本語がほとんどできないレベルでもやりとりが起こっていることから、そのような現実のやりとりを観察したり、授業に取り入れたり、日本語力の違いにとらわれない、リソースとの様々な接触の場や機会を設定・企画することも考えられる。

そして、単に学習者を観察し、情報を提供するだけではなく、提供する情報が活用されるためにも、それらが学習者の日本語学習にとってどのような意義や機能があるのかについて、様々な視点から検討する必要がある。実際に学習者は教室外で様々なリソースに接触しているにもかかわらず、それらが日本語教科書や参考書等の利用や教室内での日本語学習とは関連付けられておらず、学習者の日本語学習のとらえ方自体が教室内での教科書等による学習に限定されてしまっている可能性もある。日本語学習に使っているリソースについて韓国の学習者に対してインタビューした際にも、実際にはコンピュータを始めとする様々なリソースに接触していながら、こちらから聞かない限り、教科書や参考書以外について学習者からはほとんど言及されないということが多く見られた。このことから、支援する側が教科書等を使って教室内で日本語を教える、指導するというだけでなく、そもそも教科書や教室とはどうあるべきなのか、どのようにして学習は起きるのか、学習そのものをとらえ直す必要がある。そうすることで、身の回りにある様々なリソースを有機的に関連付けることができ、教室内と教室外における学習者の様々な学びを結び付け、支援するような学習環境を整備することが可能となる。そのためにも、「リソース」が多様性による違いを超えた連携のためのツールとして認識され、活用される可能性が期待されるのである。

6. 課題

本調査からタイ（バンコック）と韓国における学習者の学習環境と学習手段の全体像は把握することはできたが、これからやるべき課題も残されている。

まず、同時に実施した教師調査の視点からの分析である。学習者調査から学習者は各種リソースを通じた日本語との接触がある一方で、学習のとらえ方が狭く、それらをうまく利用できていない、あるいは限定的な利用にとどまっている可能性が示唆された。しかし、このような学習者の学習観はこれまで経験した言語教育や教師の影響が大きいと考えられることから、教師が学習者のリソースをどのようにとらえているのか等、学習者と教師の両面から分析する必要がある。

また、同時並行で行っている国内外の他の調査結果との比較、検討である。今回、物理的な距離やリソースの質・量といった面において、日本に近い韓国と遠いタイでの学習環境を比較、検討することで、その類似点と相違点、さらにはそこからこれからの支援の在り方への示唆が得られた。今後、この両国とはまた別の面で異なりを見せ、現在調査が進行している国や地域、さらには最もリソースが豊富にある日本国内の現状についても比較、検討することで、そこから新たな知見を得、今後の連携の可能性を探ることができる。

そして、当然ながら本調査研究の対象となる学習環境と学習手段は時々刻々と変化する。そのような意味でも、本調査結果は調査時点での各調査地域の全体像を把握し、「リソース」の視点に基づいたこれからの議論のための基礎資料を提供したにすぎない。各現場における現状が異なることは十分に考えられ、特に海外の各現場における個別の学習環境を外から把握することには限界がある。そういった現状を踏まえながら、国内外の各現場をつなぐネットワークを構築し、本調査研究の各現場における、各現場に根差した継続を進めていく必要がある。

参考文献

- 石井恵理子・岡部真理子・下平菜穂・富谷玲子 2003 学習リソースの再検討：日本語学習の多様性を読み解くためのフレームワーク作りに向けて 第2回日本言語政策学会研究発表会資料 pp.22-23
- 小河原義朗・笠井淳子・金田智子・石井恵理子 2004 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—タイ調査報告— 2004年日本語教育学会国際研究大会予稿集発表1 pp.131-136
- 国際交流基金日本語国際センター 2000 海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査・1998年—
- 国立国語研究所 2002 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—タイ(バンコック)アンケート調査集計結果報告書(日本語版・タイ語版)
- 国立国語研究所 2004 日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—韓国アンケート調査集計結果報告書(日本語版・韓国語版)

連絡先 ogawara@kokken.go.jp 報告書入手連絡先：jkasai@kokken.go.jp